シマエナガ通信　第 10 号　地域医療合同セミナー

8月31日から9月2日までの3日間、留萌市において札幌医科大学医学部3年生の地域医療合同セミナー「地域密着型チーム医療実習」が行われました。医学科の学生23名を迎えてのやや大がかりな実習です。

2日目の午後は留萌市立病院での実習でした。まず留萌地区の健康課題の一つである高血圧について高橋から講義を行いました。講義内容を踏まえ、実習では聴診法以外にドプラ血流計で収縮期血圧を測定したり、頸動脈エコー検査と心エコー検査を医師の指導のもと学生同士で実際に体験したりしました。



臨床実習に入る前の医学生の皆さんにとっては、エキサイティングな実習だったのではないでしょうか。なお本実習については地元の日刊留萌新聞にも掲載されました。

実習では介護施設を訪問するなど、大学ではなかなか学べないことも多かったようです。未来の地域医療を担う医学生の皆さんに期待しています。（高橋）

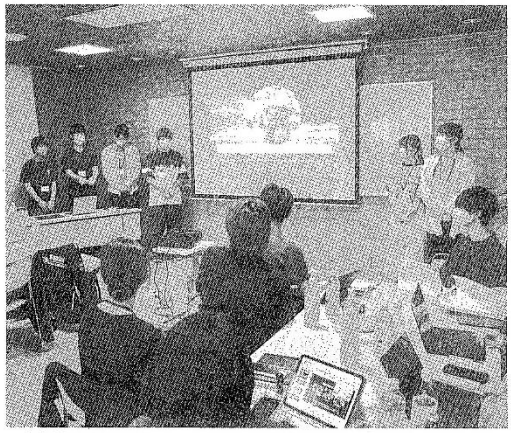
日刊留萌新聞
2026年（令和8年）9月4日（金）　掲載記事

札幌医科大学の地域医療実習

その人らしい暮らしを維持するのが医師

学生23人の大きな学びに

札幌医科大学の地域医療実習が8月31～9月2の3日間、留萌市内で行われた。最終日の2日には、午後2時からるもい健康の駅で同実習カンファレンス（発表会）が開かれた。参加した医師を目指す医学部の3年生合わせて23人が、高齢者宅訪問を通じて感じたことや、その人らしい暮らしを維持するために医師がすべきことなどを発表した。（原田学）



地域医療実習の成果を発表する札医大の学生

市は、地域医療実習で求められる環境を提供できるフィールドを留萌につくるため、平成23年度から留萌地域医療人育成プログラム（留萌モデル）構築事業に取り組んでおり、同年から札医大の実習を受け入れている。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、令和2～4年は中止され、5年から再開している。

札医大の学生は、教員と共にバスで留萌に訪れた。7人ずつと8人ずつの計3グループに分かれて3日間にわたり市内の高齢者宅、市立病院、デイサービスセンターはーとふる、株式会社ファミリーケアサポートで実習を行った。

最終日に行われた発表会は、市立病院、市保健福祉センターはーとふる、ファミリーケアサポート、市コホートピア推進室、健康の駅などの関係者が見守る中で開かれ、札医大の磯山響子助教が進行を担当し、A、B、Cグループの順に前に出て、自分たちで制作した資料をスクリーンに投影しながら、実習で感じたことを説明した。

高齢者宅訪問は、グループごとに異なる人を訪ねた。セルフケア能力が高く人のつながりに支えられている80代女性、友達が亡くなり話す人がいなくて寂しいという90代男性、健康の駅で得た健康知識を積極的に取り入れている70代男性の姿を伝えていた。

また、市立病院で血圧測定やエコー検査を体験したことや、はーとふるは高齢者同士のコミュニケーションの機会が生まれており、大きなお風呂が充実していること、ファミリーケアサポートは職員がとても優しく、高齢者が自ら利用したい施設を選ぶことができるのが素晴らしいーと紹介していた。

加えて、留萌は坂が多く、高齢者が自宅から徒歩でスーパーに通うのが大変なため、タクシーを利用している人がいるという気付きも挙げていた。

さらに、「医療と介護が連携して切れ目のないサービスを提供したいと思います。医師に求められているのは、その人らしい暮らしを維持することだと思います」、「医師は患者さんから偉そう、怖いと思われることがあると思いますが、気さくな会話ができる医師になりたいと思います」と将来に向けた決意を語る学生もいた。

全ての発表が終了したあと、長年にわたり札医大の地域医療実習に関わっている市コホートピア推進室の堤一隆主査は「皆さん、いいお医者さんを目指していただきたいと思いますし、また留萌市に帰って来ていただければうれしいなと思います」と学生にエールを送った。

最後に、磯山助教が「今まで講義室の中だけだったお話が、留萌の空気、地域の中で体感・体験できたことは、本当に大きな学びになると思いますので、絶対に忘れないでください」と学生に声を掛けていた。